

# 映画のなかの先生と子どもたち

山田 博之

私が演出という立場で幼児の映画にかかわるようになってもう八年が過ぎました。演出といっても、ドラマと違って出演者に演技指導するわけではないので、構成・編集といったほうが正確かもしれない。ともかく、最初に撮った子どもたちが三年保育の年少でしたから、その子たちももう小学校六年生になっているわけです。月日のたつ

のは本当に早いです。

私がかかわっている映画は、文部省の指定教材として、幼稚園の先生や教員を目指す学生に観ていただくものです。昨春秋、私が携わった八作目の「きょう、きてよかったねーサトシのこだわりと自分さがしー」（以下、「きょう、きてよかったね」）をお茶の水女子大学附属幼稚園の林の組で

撮影させていただきました。そのときの思い出をもとに、私たちスタッフがどのように映画をつくっていくのかを記します。

### シナリオのない映画づくり

「きょう、きてよかったね」は、あくまでもミニ四駆あそびにこだわる、サトシ君という四歳児が主人公です。彼のこだわりにつきあいながら、幼児の自分さがしを支える先生の役割を伝えていきます。

しかし、はじめからこのようなシナリオがあったわけではありません。何が起るか分からない保育の現場をありのままに描くこの映画は、いつもゼロからのスタートです。

### ロケハン主演探し

映画づくりはロケーションハンティング、いわ

ゆるロケハンからはじまります。この仕事の都合、それは子どもたちの顔と名前を覚えることです。

私がかかわる前、もう二十年もこのシリーズを撮り続けている八木カメラマンは、子どもの名前を覚える名人です。ロケハンをはじめて二日目になると、もうほとんどの名前を覚えていきます。それほど、もうほとんどの名前を覚えていきます。それほど、もうほとんどの名前を覚えていきます。それほど、もうほとんどの名前を覚えていきます。

前に八木カメラマンが野村睦子先生との対談集（「この人に聞きたい」プロに学ぶ保育の基本―）のなかで、子どもの名前を覚えるコツを、「おはよう」とか「こんにちは」とか声をかけてコミュニケーションをもつことだ、ただ見ているだけではだめ、と言っています。まったくその通りで、一言でも口を聞いた子は、印象がまったく

違います。

さて、このロケハンでもっとも大切なことは、主役の子どもを見つけたことです。よく「どんなふうに主人公を決めているのですか？」と質問されますが、一言でいえば、子どもらしい子ども、自分のイメージや感情を全身で表現している子どもです。

ただ、この主役というのは、とりあえず決めるだけで、はじめ主役として撮りはじめた子が最後には脇役になっていたり、たまたま風邪で休んだためにほかの子を撮ったら、その子の方がよかった、ということもありました。

いつも八木カメラマンと何人かの名前を挙げながら検討し、とりあえずこの子ではじめてみようか、という程度のスタンスでスタートします。

今回、サトシ君に決めたのは、先生と一緒に牛乳パックでミニ四駆コースを一生懸命つくってい

る姿が印象的だったからです。しかし、撮影の半ばまではたしてサトシ君で押し通せるかどうか、半信半疑のままでした。

### 保育のドラマを切りとる

一週間ほどのロケハンが終わると、いよいよ撮影がはじまります。

撮影スタッフは全部で四名。カメラマン、カメラ助手、録音、そして演出の私です。

幼児の映画をはじめ撮ったときには、子どもたちがカメラを意識するのではないかと心配でした。しかし、実際にはそんなことはほとんどありません。むしろ、マイクの方が気になるらしく、よく「UFOだ」と騒ぎます。長いサオの先につけて画面の上から会話をねらうマイクが、UFOに見えるのです。ときどき上を向いて歩いている子が写っていますが、マイクを気にしているの

す。

さて、こうして撮影した映像は、その日のうち  
に全部チェックします。このとき、現場では気づ  
かなかったさまざまなお見えてきます。

先生方もそうだと思うのですが、保育の現場で  
は周囲が気になってひとつの場面だけを見続ける  
ことはできません。ところが、いったん映像に記  
録されると、画面のなかだけを集中して見るこ  
とができます。一人の子を追いかけていけば、そ  
の子だけを見続けることもできます。動きが分かる  
だけでなく、気持ちまで伝わってきます。カメ  
ラのフレームが、保育のドラマを切りとって  
いくのです。

また、映像は繰り返し見ることもできます。あ  
る子どもが唐突にあそびに加わってきたように見  
える場面でも、その前をもう一度見直してみ  
ると、少し離れた場所からあそびの様子を興味深そ

うに見ていた、ということもよくあります。

今回の映画では、サトシ君ともう一人、ヒロア  
キ君という子が主役として登場しますが、前半部  
分は、ヒロアキ君を意識していたわけではなく、  
サトシ君の動きを追っていたら、たまたまヒロア  
キ君も写っていたのです。

### つぶやきを聞く

カメラとともに、保育の場面を切りとるのにな  
くてはならないものにマイクがあります。映画を



ご覧になった方々から「子どものつぶやきがよく入っている」と、お褒めのお言葉をたびたびいただきますが、秘密は高感度のマイクにあります。

しかし、カメラはズームすれば被写体に近づくことができますが、マイクにズームはありません。子どもたちのつぶやきをとうとうすれば、マイクを近づけなければなりません。ときには画面の中に入ってきてしまうこともあります。こんなときはカメラマンと録音マンの闘いになります。が、たいていはカメラマンが折れて、マイクが入らないように構図を修正します。

マイクの話でもう一つおもしろいと思うのは、子どもたちのつぶやきが入る距離というのは、耳で聞きとれる距離とちょうど同じ位だということです。

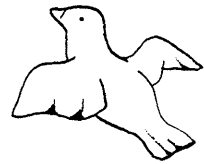
私たちが自分の目と耳で子どもの様子を知ろうとするとき、表情は少しくらい離れていても分か

りますが、つぶやきまで  
は聞きとれません。これ  
と同じことが、レンズと  
マイクの関係でもいえる  
のです。

### 起承転結を待つ

さて、二日目までは順調にいった撮影ですが、三日後以後、なかなか思うような場面が撮れなくなりしました。サトシ君は相変わらず「ミニ四駆あそび」といってゴムタイヤを転がし続けています。

保育の流れのなかには、先生が新しい環境を投げかけることで違うあそびが生まれ、それによって子どもたちのなかに葛藤が生まれるときがあります。映画のなかに起承転結をつくらうとする私たちが待ち望むのは、こんな保育の転換の場面で



す。

それが撮影をはじめて九日後にやってきました。ヒロアキ君たちがお山でソリアそびをはじめたのです。そのあそびをサトシ君は、こだわり続けるミニ四駆あそびに結びつけ、「きょう、きてよかった」と語りかけるラストシーンにつながっていったのです。

### 先生と子どもたちが本当の演出家

今回は全部で約十時間分の場面を撮影しました。それを編集で三十分の一に縮めます。映画の編集では、後に撮影した場面を前にもってくる、という手法がよく使われます。しかし、このシリーズに限ると、ほとんど使えません。違和感があるのです。

編集作業はその時期の保育の流れのダイジェストをつくるようなものです。とすると、映画の本

当の演出家は、幼稚園生活のなかでさまざまなお話を生みながら暮らす、先生と子どもたち自身なのです。私の役割は、現実の幼稚園生活を映画という別の世界に移しかえることだと思います。

映画のなかの先生と子どもたちは、永遠に年をとりにません。笑顔も泣き顔もあの時のままです。いつか先生と子どもたちと私たちスタッフが集まって、映画を観ながら同窓会をしたらどんなに楽しいことだろう、その日の来るのを願っています。

(フリーディレクター)